

船乗りは古来、星を見て海を渡ってきた。北極星は北を知るもっとも簡単な目印であるし、六分儀が開発されると太陽や星々の高度から自分の緯度経度を算出できるようになった。現在は、GPS（グローバルポジショニングシステム）という非常に精度の良い、人工衛星を使用した電波航法が発達し、天体の星の役割を人工の星がとって代わる時代となっている。

船乗りとして古い年代に入る私は、太陽や星の高度を測定して算出する天体航法の影響で、主な恒星の名前と、天球内における位置と、良く見える季節を記憶している。航路の関係で南半球に行くことはないので、残念ながら「みなみじゅうじ座」や「ケンタウルス座」などは私の頭のメモリ内には入っていないが、北半球の春夏秋冬に代表される星座や星は、頭の中を検索すれば、すぐに出てくる。

星座に関する知識はこの職業になってから覚えたのではない。小学生のころから興味を持っていた。そのため、薄明・薄暮の甲板上で六分儀を抱え、星座早見盤を回しながら、「あの星はなんていう名前だろう？」と苦勞することはなかった。

では、昔を振り返ってみよう。

私が、一番初めに覚えた星座・・正確に言えば星座ではなく、星の並び・・は、北斗七星である。次が「カシオペア座」だ。これらは、北極星を見つける星座（星の並び）として、多くの人が知っている。教科書にも載っている。けれど、私の星座への興味は、ある本との出会いから深まった。

その本の名は「星座を見つけよう（H. A. レイ文・絵、草下英明訳。福音館書店）」である。購入して30余年が経つが、今も自宅の本棚にあって現役である。大人も楽しめる本だ。

この本の良いところは、星座を線画で説明しているところだ。出版されている多くの星座の本には、星座の写真の上に、ギリシア神話を元に描かれた「芸術性の高い絵」が重ねられている。実際の星座をどう見たって、そういう「絵」にはならない。「星座を見つけよう」は、子供にもわかる線画による説明で、小学生の私の興味を大いに引いた。

小学生のうちに、「みなみのうお座」のフォーマルハウトを除いて、日本から見える全ての一

等星と名の知られた星座を制覇(?)した私が、大きなショックを受けたのが、昭和55(1980)年のテレビ番組「コスモス(宇宙)」であった。視聴者が想像の宇宙船に乗り、宇宙へ出かけるという設定で、多くの美しい天体写真やアニメーションを使って進行していく番組を、食い入るように見たのを覚えている。「一」から「無量大数」まで桁を順に読み上げていくCMも印象的で、そのとき呪文のように覚えた「桁」は、今も暗誦することができる。当時、カール・セーガン博士の高名は知る由もなかったが、この番組が私の一生に与えた影響は計り知れない(と思う)。

「コスモス」で、すっかり天文少年になってしまった私は、高校から理系に進学し、科学雑誌「ニュートン(ニュートンプレス)」の定期購読を始め、「理科年報(国立天文台編纂。丸善)」や「天文ガイド(誠文堂新光社)」や休刊になってしまった「星の手帖(星の手帖社)」などを、大きな天文イベントがあるたびに読むようになっていった。

昭和57(1982)年には「惑星直列」があり、惑星どうしの引力が影響しあって「地球に大災害が起きる」とか、「太陽系の終わり」とか、恐怖心をあおる番組や記事をマスメディアが流して、私も不安になったが、結局は何も起きなかった。夜空を見上げて、惑星が直線的に並んでいるわけでもなかった。

もちろん、1999年に惑星が「グランドクロス」となって「世界が破滅する」というノストラダムスの大予言は、はなから信じていなかった。

残念ながら頭は良いほうではないので、大学進学と同時に天文を仕事とする可能性は消えた。天文学者にはなれなかったが、現在はそんじょそこのオジサンとは一線を画す自称・天文オヤジとなっている。

ただし、その天文オヤジは素直ではない。これだけ星空が好きなのに、天体望遠鏡を持っていない。プラネタリウムにも行かないのだ。

理由は、職業にある。船乗りには、天体望遠鏡もプラネタリウムも必要ない。プラネタリウムに行かなくても、船の上で本物の星空を見ることができる。天体望遠鏡なんて必要ない。肉眼で十分だ。天の川まで見える。

それでも、ガリレオ衛星や、アンドロメダ大星雲を見たい時は、船橋(ブリッジ)横の張出し(ウ

イング) に備えつけてある見張用20倍双眼鏡を星空に向ければよい。

日本を少し離れた海上では、真っ黒なじゅうたんの上に色とりどりの宝石を散りばめ、銀の砂をまいたような星空が、水平線より上方のすべての空間を占めている。文字どおり満天の星空・・・星の満ちている空である。都会の夜空では、一等星は目だつ存在として天空に輝き、星座を見つける目印となる。しかし洋上では、すこしオーバーな言い方をすれば、一等星も六等星も同じような光度で輝いているのだ。天の川は乳白色の帯として流れ、ときおり、その星々のあいだを人工衛星の光が横切っていく。本当に感動的な情景である。

月も見事である。星空を見るのには邪魔な存在だが、満月は信じられないほどに明るい。満月の光で影絵ができる。本は・・・読んだことはないけれど、活字は見える。夜光虫の多い海域では、「星明かり」と「月光」と「夜光虫の描く航跡」という、3大(?)光のファンタジーに魅了されるのだ。

洋上勤務から陸上勤務になり、東京本社や横浜の事務所に詰めるようになると、星空が非常に恋しくなる。隅田川ウォーターフロントやみなとみらいでは、人工の照明が煌々(こうこう)と輝き、夜景スポットとしては非常にきれいで、それはそれですばらしい場所ではあるが、地上の明るさで星空はかすんでしまっている。そこでは明滅するカラフルな光芒に見いつている人々は多々いるが、夜空を見上げている人は皆無である。

そもそも、都会の人は満天とは言わないまでも、星空を見上げたことがあるのだろうか？

などと考える私も、陸上勤務の今は、満員の通勤電車とデスクワークと残業の毎日で、そんなゆとりはないというのが本音だ。

うれしいことに、最近、息子が星空に興味を持ってきている。夏の皆既日食がきっかけだという。その息子と一緒に、ついに初めてプラネタリウムへ行った。西東京市の多摩六都科学館である。

これを機に、「星座をみつけよう」の所有権を息子へ譲った。これからの季節(冬)は、星座ウォッチに一番適した季節だ。「オリオン座」を筆頭に、冬の夜空を彩る数々の星座と一等星について、ひとつひとつ、息子に教ようと考えている。

そして私がたどってきたように、息子も星空を見る楽しさを覚えてほしいと願っている。